

そのひまわり

S · K 生

ほつとした顔ミでもいふのであらう。保育修了式の後の茶話會をすませて、子ぎも達や親達を送り出した後を、保姆室の小卓を圍んでみんなでお茶を飲んでゐるまゝころである。茶話會が賑かであつたゞけに、園内が一層しんみしてゐる。その静かさの中に、先生達は今歸つて行つた一人一人の子ぎものを追ふてゐるのらしい。

「ほんきに、あの子は……」

心なしか、A先生の目がぬれてゐるやうである。

「私の組の名物男でしたのよ」

B先生の頬が紅くほてつてゐる。

「けふのお菓子は嬉しそうでしたね」

C先生が、うつさりにして、ひさりごこのやうにいふ。

何にしても二ヶ年いつしよに遊んだ子ぎも達である。抱いてゐた小鳥が飛んでいつた後のやうな氣持、先生達の今の心であらう。D先生、E先生、F先生、G先生も、同僚の心持ちを預けて、いろ／＼語りあつてゐる。

茶卓の中央にはフリヂヤが白く咲いてゐる。さつきから黙つてお茶ばかり飲んでゐるのは主事である。

新學期の始まつた日、職員室の塗板に

若い芽「草も木も」を
大切に
する教育

ご板書されてありました。まがふ方もなく倉橋主事の御筆跡。

園のお庭には、こゝ數日前に桃や栗、柿梅等の苗木が植ゑられたのでした。それを、大きい組になつたので、何か枯木の刀でもさして威張つて見様云ふ元氣盛りの男の兒が二三人、植木ミ間違へて手折らうとしたのです。ひつこ抜かうさしたのです。こんな子供達の様子が主事のお目に止まつたのです。また、クローバーの若芽が、いじらしくも踏みつけられてゐる事がちよい／＼ありますので。